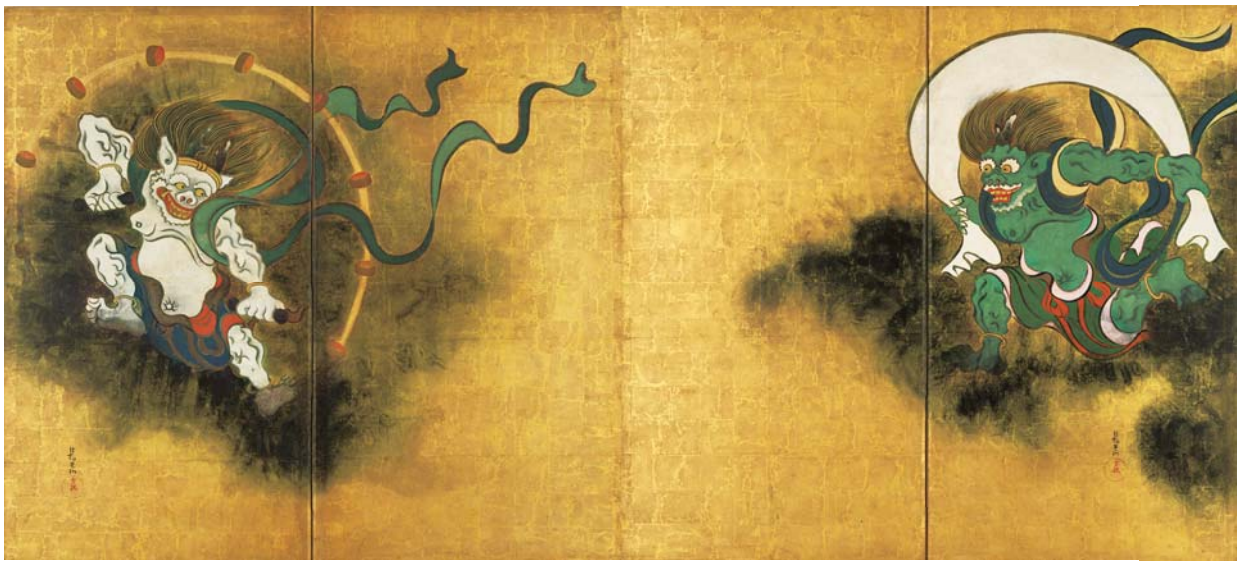
石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第359号　平成25年9月1日発行

当館企画展

俵屋宗達と琳派



重文「風神雷神図」尾形光琳筆　東京国立博物館蔵　1711～1716年頃
Image:TNM Image Archives
※本作は、展覧会初日から9月29日までの展示となります。展示期間にご注意ください。

■加賀藩と寛永文化
－本阿弥光悦と前田家－

■琳派 様々な表現

■工芸品に見る秋草

■鴨居 玲 ー蠢くー

■日本画 女性美十色

- 9月前半の展覧会
  尊經閣文庫名品展ー国宝 水左記を中心にー
  古九谷とその展開／石川の工芸Ⅱ
  みる･きく･かたる／最後の絵師 勝田深氷展
  第2回 日展石川会展
- 文化財現地見学募集
- 企画展Topics
- 9月の行事予定

当館企画展

石川県立美術館30周年 金沢宗達会創立100年記念

俵屋宗達と琳派

9月14日(土)～10月14日(月・祝) 会期中無休

1F企画展示室

学芸員の眼

作家の三島由紀夫は「俵屋宗達」(昭和三十二年)の中で、「彼の空間感覚は、象徴主義や哲学には縁がなく、どんな精神主義とも無縁」と論じています。昭和三十年代から四十年代は、西洋の近現代の思潮が日本でもてはやされ、日本の文化も象徴主義や実存主義に表面的にこじつけると、何となくわかったような気がするという風潮がありました。三島の言葉は、そうした風潮に対する鋭い牽制と思われます。しかし、この三島の鮮やかな評論によって、俵屋宗達に対する思想的な探求が尻込みしたことも否めません。

そこで本展では、この問題に正面から取り組みます。俵屋宗達や尾形光琳にとって、描くということはどのような意義をもっていたのか。そして描かれた作品は何を語っているのかを、『法華経』や芸道思想などを手掛かりに解き明かします。

俵屋宗達の作品は、江戸時代から「影法師を写したようだ」と評されていました。これは、おそらく宗達の水墨画に多用された、たらし込みなど墨のぼかしや、にじみの表現についての言葉だと思います。しかし宗達の作品全体を眺めますと、たとえば古い絵巻から形象を切り取って、全く別の文脈に転用するなど、形自身が何かの意味を新たに担っている、すなわち何かを写していることに気づきます。

そして、その形を取材した文脈と、宗達の新たな作品の文脈がどのようにつながるのか、あるいは全く断絶しているのか、その点を知識と想像力を駆使して検証することが、宗達作品を鑑賞する醍醐味ということができます。こうした趣向性は、能楽や茶の湯を深く嗜んだ宗達ならではのものです。

世阿弥は、そこに創意工夫をめぐらしていることを鑑賞者に気づかれないことが、演技者にとって重要だとの趣旨の言葉を遺してします。宗達の作品を知れば知るほど、世阿弥の言葉の重みを痛感します。一見単純明快な宗達の作品、決してそこに深い含蓄はなく、高遠な仏教思想など反映していないなどと速断しないでください。

今回の展覧会では、そのような従来の宗達観を根本的に見直したいと考えています。作意や趣向は、数寄者だった宗達にとっては基本中の基本だったはずですが、芸道思想から宗達の画業を捉え直すことは、これまでほとんどなされていませんでした。ですから、宗達芸術の本当の面白さは何か、ということを展覧会をとおして問題提起したいと思います。

そして、宗達の本当の面白さを、誰よりも理解していたのが尾形光琳だったことも改めてご紹介します。是非ご鑑賞ください。

重文「牛図」俵屋宗達筆
烏丸光廣賛　頂妙寺蔵　江戸17世紀

前田育徳会
尊経閣文庫分館

特別陳列

加賀藩と寛永文化

ー本阿弥光悦と前田家ー

9月13日(金)～10月14日(月・祝) 会期中無休

俵屋宗達が活躍した江戸時代初期の寛永時代を中心として、京都で花開いた文化が寛永文化と呼ばれています。そして、その寛永文化の中心的存在が後水尾天皇(一五九六～一六八〇)です。

徳川幕府は封建体制の確立とともに、皇族や公家から政治を分離させ、学芸に専念させる事を目的に、「禁中並公家諸法度」を発布しますが、後水尾天皇はこうした政策を逆手にとるかのように、朝廷やその周辺の文化人たちとともに、茶道文化に、平安時代の王朝文化を融合させ、さらには儒教や禅の精神を包括した、日本文化史上特筆すべき寛永文化の中心的存在として活躍するのでした。

この時代の加賀藩に目を転ずれば、三代藩主前田利常(一五九三～一六五八)の時代です。

利常は大藩で外様大名という前田家から徳川政権の警戒をやわらげる為に、文化政策に加賀藩の存在意義を求め、後水尾天皇を範として、当時の京の都における超一流の文化を学び吸収することで、加賀の文化の礎を築いたのでした。後水尾天皇をはじめ、八条宮家、近衛家、さらには本阿弥光悦、小堀遠州、松花堂昭乗といった寛永文化の人々と、利常やその家臣たちとの確かな文化交流を、現在、前田育徳会が所蔵する後水尾天皇ゆかりの作品、前田利常と小堀遠州の書状、さらには本阿弥光悦と加賀藩の家臣たちとの書状などを中心とした十六点の作品から紹介しますので、「俵屋宗達と琳派」の展覧会と合わせてご覧ください。

学芸員の眼

徳川幕府と天皇家、徳川幕府と前田家の関係には共通点があります。幕府は中央集権国家体制強化のために、天皇家との公武合体を望み、後水尾天皇へ二代将軍秀忠の女和子(まさこ)を入内させ、大藩で外様大名の加賀藩前田家に対する警戒から、三代藩主利常に、同じく二代将軍の女珠子を嫁がせます。こうした将軍家の政治的策略は、後水尾天皇と利常のつながりを一層深いものとしました。のちに利常の女富姫は二代八条宮智忠親王(後水尾天皇の従兄弟で猶子)の妃となりますが、智忠親王は父智仁親王が造営した桂の別荘(今日の桂離宮)を改修整備し、王朝の雅の精神を具現化した数奇の別邸を完成させます。そこに加賀前田家の経済的援助が大きなバックボーンであったことは言うまでもありません。

第2展示室

琳派 様々な表現

9月13日(金)～10月14日(月・祝) 会期中無休

「俵屋宗達と琳派」展は、俵屋宗達、俵屋宗雪、喜多川相説、尾形光琳の絵画を主体とした構成としているところが見所となっています。したがって作家が特定されない絵画や、工芸の作品は、光琳の「蒔絵螺鈿白楽天図硯箱」以外は展示されません。そこで今回の特集では、加賀で開花した俵屋の草花図の優品と、尾形光琳の漆芸作品、光琳の弟、乾山の陶芸作品を館蔵品、寄託品の中から選んで展示します。

俵屋宗達の後継者、宗雪が京都から金沢に下り、加賀藩の御用を務めたことから、加賀地方には宗達、宗雪らが用いた「伊年」と同じような印が捺された草花図屏風が数多く伝来しています。それらの作品には、京都とは幾分異なる独自の美意識が発揮されており、加賀の好みが反映していると考えることができます。

続いて光琳の漆芸作品に注目いただきたいと思います。光琳自身が蒔絵を行ったかは断定できませんが、光琳は蒔絵の図案を数多く制作しています。そこには、光琳らしい洗練されたデザイン感覚が見られます。さらに弟の乾山も忘れることはできません。野々村仁清の雅な色絵の世界は乾山に継承されました。そして乾山は、派手な生活を送る兄の光琳に、本腰を入れて制作するように強く申し入れをしています。

こうした様々な背景やドラマが、琳派の様々な表現となっています。今回は企画展観覧券で全館ご覧いただけますので、この特集もどうぞあわせてご鑑賞ください。

県文 蒔絵螺鈿野々宮硯箱　尾形光琳　江戸17世紀

第3展示室

鴨居 玲 ―蠢く―

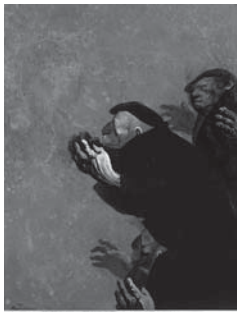
9月13日(金)～10月14日(月・祝) 会期中無休

うごめく(蠢く) ＝ 虫がはうように絶えずもぞもぞ動く。

鴨居の絵にはよく黒いベレー帽をかぶった黒コートの男が登場します。当館の所蔵品でいえば、「赤い老人」、「群がる」、「蛾と老人」、「静止した刻」の主役に、そして、「一九八二年 私」では脇役として描かれています。鴨居が一九七一年にスペインに渡り、老婆や酔っ払いをテーマとするまで、鴨居の好んだ男達でした。何かに祈り、サイコロゲームやトランプに一喜一憂する様を描くのですが、不気味な表情の男達がそれぞれのポーズで凝固する「静止した刻」や「群がる」は、黒いコートで単純化された男達の体とそこから突き出る巨大な手が甲虫を連想させ、蠢いていると感ずるのです。

また、本当の虫もしばしば描かれます。「蛾と老人」には、アコーディオンの調べを花に見立て、その蜜に集まる「蛾」が、あるいは当館の所蔵品ではありませんが、男の見つめる先に一匹の「蝿」を描いた作品や、鴨居の口から言葉が蛾となって連なって出ている作品もあります。蝶ではなく、蛾と蝿なのです。これは、鴨居が若く美しい女性ではなく、皺を刻んだ仮面のような老婆を描き続けたこととも関連することだと思われます。

ほぼ、毎年鴨居の命日9月7日前後に、特集を組んでいますが、今回は「蠢く」をキーワードにご覧いただきたく思います。



群がる　鴨居 玲

第5展示室

工芸品に見る秋草

9月13日(金)～10月14日(月・祝) 会期中無休

工芸作品にほどこされる意匠は、わが国の風土を反映したものが多く見られます。とりわけ、四季折々に多彩な様相を呈する自然は、作家にとって、豊かな創造力をかき立ててくれる存在であるということができましょう。一口に自然といっても、その中には草や木、花などの植物、虫、鳥、動物などの生きもの、さらには雲、雨、大気などの自然現象も含めて様々です。今回の特集展示では、秋にちなんだ植物文様を表現した作品を、まとめて展示いたします。

従来の展示では、陶磁、漆工、染織、金工など、技法・材質による分類によって、それぞれまとめて配置していましたが、本展では同じモチーフを意匠化した作品を、とくにジャンルにこだわらず並べるような形で展示構成してみたいと思います。たとえば、『桔梗』の意匠が美しい、陶芸の吉田美統作《釉裏金彩秋草譜飾鉢》と漆工の中野孝一作《秋草蒔絵小箪笥》、『稲穂』の意匠に秋の抒情が漂う陶芸の竹田有恒作《釉裏金彩稲穂波文鉢》と漆工の田崎昭一郎作《稲穂蒔絵漆筥》、『ススキ』が肌に冷たい秋風を感じさせる漆工の大場松魚作《平文薄の棚》・池田喜一作《枯尾花文色紙箱》と陶芸の戸出政志作《色絵秋麗飾壺》などをあげることができます。次第に深まる秋の風情を、作品に感じ取っていただければ幸いです。

秋草蒔絵小箪笥
中野孝一

釉裏金彩秋草譜飾鉢
吉田美統

第6展示室

日本画 女性美十色

9月13日(金)～10月14日(月・祝) 会期中無休

古今東西、女性を美の対象として鑑賞することは人類の常であり、文化であったといえます。古来よりそれをテーマに、多くの作品が作られてきました。女性美の本質は変わらないのかも知れませんが、時代や土地、文化などにより、美の基準は微妙な変化を見せます。特にそれぞれの国の持つ文化が、固有の女性美の概念を形成したことは認められるところでしょう。

ご存知の通り日本には、女性美を表現した「美人画」と呼ばれる作品群があります。一般的に美人画とは、特定された人物の人格を描くのではなく、類型的に捉えた女性美をテーマとした絵画といえるでしょう。江戸時代の浮世絵に端緒をみるこのジャンルが、盛んに描かれたのは明治から戦前にかけてです。東は鏑木清方や伊東深水、西は上村松園、北野恒富らが美人画家とよばれ、彼らが描く女性は当時の人々を魅了しました。しかし美人画家とよばれた人たちが鬼籍に入ったこともあり、戦後美人画は衰退します。この頃ミスコンテストが台頭してきますが、時期が重なるのは偶然ではないでしょう。作家達は女性を日本人が求めてきた類型的な美から解き放ち、人間の本質を表現することを探り始めたのです。

今回、第6展示室では明治・大正期の版画、そして北野恒富や上村松園らによる戦前期の美人画から戦後日展系作家による女性像まで、当館所蔵の女性像を多様な視点で紹介します。

三味線
北野恒富

九月前半の展覧会

七月二十五日(木)～九月九日(月)会期中無休

前田育徳会尊経閣文庫分館

尊経閣文庫名品展

―国宝 水左記を中心に―

毎年この時期に開催する「尊経閣文庫名品展」の大きな魅力の一つが、指定文化財の公開です。「今年は何が展示されますか」、「展示替えの予定はいつですか」といったファンの皆様からのお問い合わせも恒例となっています。二十年ぶりに公開する国宝「水左記」は、巻替えをしながら会期通しで展示していますので、ぜひともお見逃しのないようにお出かけ下さい。

東京国立博物館では「和様の書」が開催されていますが、今年は書の展覧会が多く見受けられます。文字を書く・・・から打つ・・時代へと変化しているが故に、「書の美」や「書の魅力」を再考することが求められているのかもしれません。

第2展示室

古九谷とその展開

第二展示室では常時古九谷を展示していますが、その点数は十二点です。今回の特集ではそれに加えて十三点の古九谷を展示しています。何よりも古九谷の優品を数多くご覧になりたいという方には、是非ご覧いただきたい特集です。そして今回古九谷の展開として、若杉窯から正院焼に至る諸窯の中から、古九谷の影響を実感していただける作品を選んでいます。「絵付けを離れて存在しない」といわれた古九谷に、再興九谷の諸窯がどのように挑んだか。今回の特集は、その熱い格闘の歴史でもあります。

色絵万年青図平鉢　吉田屋窯

本展では、鑑賞者の作品への語りかけを書くカードを用意し、展示室内に貼って頂いています。子どもたちだけでなく、大人の方にもご参加頂いており、作品を見ての感想等いろいろな方のつぶやきをご覧いただくことができます。私たちが作品をみる時は、その人の経験や興味をもとに作品をみているといいます。子どもが書いたとおぼしきカードに、純真でまっすぐ作品を見つめる心を見つけ、自分がいつの間にか無くしてしまった心に気づかされることもあります。「今日はどんなカードが新たに貼られているかな」と、このコーナーをのぞくのを楽しみにしている担当者です。

第5展示室

石川の工芸Ⅱ

今回の特集では石川県にゆかりのある工芸作品の中でも、器物や着物といった実用品というよりも、どちらかといえば彫刻や絵画を思わせる、造形的な作風のものを中心に紹介しています。どの作品もそれぞれ素材の特質を生かした加工が施されており、作者の素材へのこだわりを感じさせます。

大型の陶芸や金属造形の作品については、特別にケースの外に出して展示し、作品の質感をダイレクトに感じることができます。照明にも工夫を凝らしましたので、いつもの第5展示室とは少し違った雰囲気になっています。この機会にぜひお越しください。

接吻スルノガイイノダ　中村錦平

第6展示室

夏休み親子で楽しむ美術館

みる・きく・かたる

九月前半の展覧会

第3展示室

最後の絵師

勝田深氷展

7月25日(木)～9月9日(月)会期中無休

昨年七月、勝田深氷氏がサンフランシスコの自宅で逝去してから約一年。本展が氏の一周忌に当たることもあり、氏を偲ぶ多くの方々が来場されました。物故作家を紹介するとき、ご遺族をはじめとする旧知の方々が納得のいく展覧会であることは、作家を過たず紹介できたということに繋がり、担当者にとって嬉しいことです。

残り数日となりましたが、版画「雪」「月」「花」の原画展示も加わり、一層氏の画業を知ることができるようになっています。一人でも多くの方の観覧をお待ちしております。

日展石川会は、県内在住の三人の日本芸術院会員を初めとする日展所属の作家で構成されています。平成二十三年以来二回目となる今展は、昨秋東京の国立新美術館で開催の第四十四回日展に出品された大作を中心に百数十点を展示します。

◇入場料
八〇〇円(高校生以下無料)、友の会は一〇〇円引き

◇連絡先
北國新聞事業局内「日展石川会」事務局
電話 〇七六―二六〇―三五八一

第7～9展示室

第2回

日展 石川会展

8月30日(金)～9月9日(月)会期中無休
(午後6時まで)

第44回

文化財現地見学募集

飛鳥から奈良へ
―日本文化のはじまりを訪ねて―

期日／平成二十五年十月五日(土)～六日(日)一泊二日
日程／出発・五日午前七時　帰着・六日午後七時頃
発着／金沢駅西口
※移動は全て貸し切りバスを使用します。
参加代金／友の会会員 二三、〇〇〇円
会員以外　二四、〇〇〇円

◆おもな見学地

【橘寺】
聖徳太子誕生の地といわれる寺院で、精進料理の昼食をいただきます。特別公開中の収蔵庫も拝観できます。

【唐招提寺】
鑑真が開創し、「天平の甍」の美を示す国宝・金堂で知られます。今秋は御影堂が開扉され、鑑真和上坐像(国宝)、東山魁夷の襖絵が拝見できます。

【薬師寺】
大盛況だった国宝薬師寺展のお礼参りとなります。ガイダンスでお馴染みとなった僧侶にご案内いただきます。

そのほか【飛鳥寺】【飛鳥資料館】【石舞台古墳】【秋篠寺】を訪ねます。

◆申込方法
往復はがきに「文化財現地見学」希望と明記し、氏名・年齢・性別・郵便番号・ご住所・お電話番号・会員番号を記入の上、ご応募ください。
※応募者多数の場合、抽選になります。

◆宛先
〒九二〇―〇九六三　金沢市出羽町二―一
石川県立美術館「文化財現地見学」係

◆応募締切り
平成二十五年九月十七日(火)必着
※行程に徒歩による移動や坂道、階段が含まれます。脚に自信のない方はご注意ください。

企画展 Topics 石川県立美術館開館30周年記念「石川県立美術館 名作の森」

会期 平成25年12月21日(土)～平成26年2月11日(火)

あなたが選ぶ「石川県立美術館 ベストコレクション」

所蔵品の人気投票を行います

昭和五十八年に開館してから今年で三十年を迎えました。この間、たくさんの作品を収蔵してきましたが、現在までに所蔵する作品は三、一一〇件を数えます。これら所蔵する名品を一堂に公開する企画が「石川県立美術館 名作の森」です。そこに展示する作品を皆さんの投票で選んでいただくこととしました。あなたの選ぶ作品で展覧会を構成します。古美術・工芸・絵画・彫刻など全分野の作品から、作品を選んで下さい。

展覧会でそのランキングを発表します。応募いただいた方には抽選で粗品(オリジナルグッズ)をプレゼントします。たくさんの応募をお待ちしております。

【応募要項】

別紙の一覧から「石川県立美術館 名作の森」に出品したい作品を「古美術」「工芸」「絵画・彫刻」の各分野からそれぞれ一点選んで記入して下さい。

一覧にない作品を選んでも結構です。その名称と作者名や窯名を記入して下さい。当館ホームページ所蔵品データベースで作品を確認できます。

また情報図書コーナーで
「石川県立美術館所蔵品図録」
「石川県立美術館名品図録」
「九谷名品図録」
「茶道美術名品図録」
から選ぶこともできます。

作品にまつわる想い出をあわせてご記入下さい。

【受付期間】

平成25年9月1日(日)～10月31日(木)

【投票方法】

①インターネットの専用ページから

②ファックスで送信
(FAX076-224-9550
名作の森展投票受付係)

③ハガキで応募
(〒920-0963
金沢市出羽町2-1 石川県立美術館
名作の森展投票受付係)

④投票箱(石川県立美術館情報図書コーナー)に直接投票

当選者の方には賞品をお送りしますので、住所・氏名・年齢・性別を必ず書いてご応募下さい。

九月の行事予定

土曜講座 午後1時30分～ 美術館講義室 聴講無料		
7日(土)	鴨居玲の構図	二木伸一郎 普及課長
14日(土)	俵屋宗達の画業 ―能楽と茶の湯の美意識から―	村瀬 博春 担当課長
21日(土)	尾形光琳の画業 ―風神雷神図への挑戦―	村瀬 博春 担当課長
28日(土)	加賀藩と寛永文化	高嶋清栄 学芸第二課長
映像ギャラリー 午後1時30分～ 美術館ホール 入場無料		
1日(日)	水墨大全4 日本的装飾美の誕生 狩野派 (六十分)	
22日(日)	水墨大全6 琳派と江戸前期の風俗画 (六十分)	

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　350円(280円)
大学生　280円(220円)
高校生以下　無料
※(　　)内は団体料金
毎月第1月曜日はコレクション展示室無料の日(9月は2日)

今月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00 年中無休

9月の全館休館日
10日(火)～12日(木)

広告
毎週水曜日は
Meiカード ポイントプラスデー
Meiカード通常ポイント ＋ 3% ポイントプラス
※催事場、地階食品売場などやご奉仕品は、通常通りのポイントとさせていただきます。詳しくは売場係員におたずねください。
MEITETSU MIZA めいてつ・エムザ
金沢・むさしが辻 TEL代表(076)260-1111
http://www.meitetsumza.com/
10時→20時●地階レストラン街・書籍は21時まで

石川県立美術館だより
第359号〈毎月発行〉
2013年9月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/